

第三章 闘いの総括

第一節 闘いの現局面

今や三〇〇日にならんとする日大闘争の中で、我々の闘いが永続的であり、かつ非妥協的に、しかも熾烈に闘い抜かれたが故に、大学当局の手段を選ばぬ闘争破壊策動、また国家権力の強権的闘争弾圧を全身にあびている日大全共闘は、極めて困難な局面に立たされている。三四億円の使途不明金追求と言う、このブルジョア体制下に於いては、ささやかな矛盾追求であったが、しかし、この闘いを非妥協的に闘えば闘う程、我々の戦線は拡大され、ブルジョア体制の根底的矛盾——賃労働と資本、即ち、無産階級と有産階級との矛盾——へと突き進まざるを得なかった。我々の闘いは、正義の闘いであり、いかに巨大な敵とあい対しても絶対に勝利しなければならぬし、また歴史が明らかにするところによれば、絶対に勝つ事が出来る。なぜなら、一一・二二、二・一一の偉大な闘いが指し示す様に、我々は闘うなかから全国に闘う学友諸君と、また全国の闘う農民、労働者人民と連帯する事ができたし、また我々の闘う

団結はますます強化されるであろう。そして、京大教授井上清氏の言葉を借りれば『歴史は我々のものであり、闘う人民のもの』であるからだ。

こうした我々の闘いが、支配者階級のその支配秩序を根底から破壊せしめる程、偉大であるが故に、敵は恐怖し、我々に死に物狂いで攻撃をかけて来ている事を見抜かなければならない。そして、この間の闘いの中から、労働者階級をはじめ全人民と明確に連帯する事ができたし、その事は、とりもなおさず帝国主義者の抑圧と搾取に苦しむ、全世界の闘う人民にかわって、この日大闘争に勝利する事、すなわち古田体制を打倒し、九項目の完全貫徹を勝ち取り帝国主義支配秩序の一角を打ち崩す任務が、我々日大生一人一人に問われている事を確認しなければならぬ。

二月一八日、日大全共闘の最後の砦、文理学部のバリケードが憎むべき国家権力・機動隊の手によって撤去され、我々は闘う根拠地を失なっている。この様な情勢の中から、我々の闘う勝利の展望を方向づけるべく、現局面を明確化せねばならない。即ち、敵は誰であり、味方は誰なのか、を明確にし、さらに、敵の弱点、味方の弱点、また

敵の攻撃は何であり、何を目的としているのかを明らかにしなければならない。

一 敵は誰であり味方は誰なのか

我々が、そもそもこの闘いに入った時、我々は三四億の使途不明金を追求する事から出発し、自ら闘いを切り拓く中で、敵は一体誰なのかを問いつける事によって問題の本質を究明して来た。

使途不明金を出す様な腐敗堕落した古田法人理事会から、それを生み出し、かつその支配体系である古田体制へと、焦点が定められていったのである。そしてこれは常に、闘う中から、つまり、バリケードストライキに突入する以前、我々が闘いを起そうとした時、常に前面に立ちふさがった教職員と右翼体育会、我々の闘いを拘束する日本精神、中道の精神に基づいた学生心得等が何であったのか、過去一〇数年間に及ぶ抑圧と弾圧の歴史が、如何なるものかを鮮明にし、認識を深める事によって、学生自治活動を徹頭徹尾弾圧し、巨額な使途不明金を出すように腐敗堕落した古田法人理事会のその支配体制、古田体制を粉砕しなければならぬ事を見抜いていったのである。そして

さらに、敵の攻撃を分析しつつ、過去の我々の闘いの総括と、反動の歴史を明確にし、古田体制を粉碎するものとして、具体的に勝ち取る課題を九項目に集約したのである。

以上の事から、我々の認識発展の過程として、常に社会的実践——日大闘争を闘う事を通して、一つ一つ深化されていったことを見てとる事が出来る。即ち実践——認識——再実践——再認識という点を全ての認識論の基調とする。

この様にして我々は、九・四の官憲導入によるバリケード撤去、スト破壊の策動を大衆的闘いによって粉碎した。そして、その闘う団結をもって古田に迫り、九・三〇大衆団交を勝ち取ったのである。この九・三〇の闘いが生み出した新たな問題は、我々の闘いが偉大であったが故に、一〇・一の佐藤発言を引きずり出したことである。古田体制打倒という日大内的な闘いが、非妥協的に、しかも闘う内容が古田体制、そしてそれは、帝国主義段階に突入した日本資本主義の教育体制に真向から反逆するものであったが故に、政府支配者階級の恐怖を生み出し、日大内的枠を突破し、佐藤自らをして、九・三〇大衆団交は政治問題であると言わしめたのであった。この事は、日大闘争に対する政府・文部省の直接介入を意味しており、露骨な権力の闘争圧殺が開始されたのであった。全共闘幹部への逮捕行動がそれであるし、その後の各学部に対する官憲導入と無差別検挙方針がその証しであった。

こうした中から我々は、古田体制をとりまく情勢、全国津々浦々で勃発する大学闘争の本質を見

抜き、とりわけ大学教育が根本的に何を意味し、その中に於ける古田体制とは一体何であるのかを追求したのである。しかも、当時高揚しつつあった東大闘争と明確に連帯しつつ、現代ブルジョア教育の矛盾をも闘かう中から暴露していったのである。即ち、ブルジョア社会に於いては、教育それ自身が、反人民性、反階級性をもっており、ブルジョアジーがブルジョアジーのために造り出したものに外ならない事を。東京大学が、支配者階級育成強化のための私教育であり、日本大学が、六十年代の高度成長期と共にブルジョアジーの要請として提起された、中級技術者育成強化の私教育であると言うこと、一般的に公教育の一環として存在する大学教育は、文字通り、ブルジョアジーの私的階級教育だったのである。

それにもかかわらず、これにたいするものとして、大学は普遍的真理の探求の場であり、国民の利益は社会の利益と云う国家共同体幻想論と、学問研究の自由、教育の中立と云うブルジョア・イデオロギーの下での『大学自治論』『大学聖域論』と言う大学共同体幻想論が存在している。しかし、そもそもブルジョア支配貫徹の道具として、ブルジョアジーのために存在している大学に於いては、これらは全て幻想であることをはっきり見抜き、粉碎しなければならぬ。日大、東大は、以上の様なブルジョアジーのための大学教育の中で、一方における官学の雄と、一方に於ける私学の雄と云う突出した部分であったが故に、また、帝国主義段階に突入した今、帝国主義それ自

身が持っている腐朽性と寄生性が深化してきたが故に、学生運動史上かつてない量と質を有した闘いとして発展してきたのであった。

六八年大学闘争の普遍的課題、すなわち全国六十数大学で激化する闘いは、単なる偶然に起った訳では決まらなかったのである。帝国主義に成長した日本資本主義が、政治的にも経済的にも、その体制を帝国主義的に再編強化する中で、教育も決してその例外ではなかった。勤評闘争をもって初・中等教育部門が支配者階級のヘゲモニーのもとに整備され、残る高等教育、とりわけ大学教育の、その帝国主義的再編が支配者階級の急務であった。このことが、一方における大学のマスプロ化と、腐敗・墮落した内部矛盾を解消すべく、具体的には近代化路線と云う形をもって我々の前に提起されてきたのである。こうしたことが、六八年大学闘争の根本的矛盾としてあったし、であるが故に全国の闘う学友諸君との革命的連帯を克ち取る事ができたのである。

そして更に、東大闘争は、政府文部省と、また前述の普遍的矛盾を見抜く事が出来ず、反革命勢力へと転落した日共民青との熾烈な闘いを展開するなかで、大学の反人民性・反革命性を暴露し、大学闘争が全人民的課題である事を提起し、全国の闘う労働者人民と明確に連帯し、一月一八日・一九日の、安田講堂、列品館、法研、そして神田地区に於ける闘いへと発展せしめたのである。佐藤をして、六九年の政治的課題は、安保、沖縄、大学であると言わしめる程、大学闘争は、支配者階級総体に迫る政治闘争へと拡大・発展した。

六九年大学闘争が登りつめた段階は、大学の存在それ自体が反革命性をもっているが故に、必然的に東京帝国主義大学解体へと突き進んだのである。

我々日大全共闘は、東大闘争、全国大学闘争を闘う学友諸君と連帯し、六九年大学闘争の、その普遍的課題を最先頭に立って切り拓いて来た事を確認しなければならない。だからこそ、二・一一に於いて、日大闘争を全人民的なものとして闘わねばならない事を、闘う労働者、農民、学生、市民と共に確認する事が出来たし、一方では、この間気狂いじみた強権的弾圧を各学部がうけているのである。

我々自身が切り拓いた偉大な闘いの質を明確に継承しつつ、帝国主義的教育支配秩序の、日大に於けるその実体である古田体制を打倒し、九項目を貫徹する事、この事が、闘う全人民と真に連帯できる内実である。

すでに明らかにされつつある様に、闘う中から我々は、敵は誰なのかを鮮明化して来た。すなわち、我々の闘いは、帝国主義教育支配秩序——古田体制を徹底的に粉碎する闘いであり、全ての焦点を古田体制にあわせなければならない。しかもなお古田体制を擁護し、帝国主義教育支配秩序を強化せんとする。日本帝国主義を目的意識的に究明していかなければならない。

我々の敵は古田体制であり、それを擁護する支配者階級であり、国家権力である。しかも、日大闘争を戦い抜く我々にとって、直面する敵は、古田体制である。そして古田体制の犯罪性、反動性

を認めず、その中にひたっている全てのもの、即ち、教授会、体育会、職員、右翼学生、全てが敵である。

しかしながら、敵内部にも矛盾がある事を見てとらねばならない。即ち、そもそも帝国主義支配秩序である古田体制は、腐敗堕落しきっている。所詮、権力争いが絶えないし、それが古田派と反古田派、中間派と相対立し、そこには権力者内部の矛盾がある。しかもそれは、ありとあらゆる機構、教授会、校友会等々に存在するし、古田独裁権力に反感をもつ部分が、ブルジョア的民主主義を唱える教授を含めて、かなりいる点を注視する必要がある。これらの部分は、我々の真の味方にはなりえない。しかし、当面する我々の敵は、一〇年前に現在の支配体制をつくり、独裁権力をうちたてた古田である。現局面に於ける我々の主要な敵は古田であり、全ての力を古田打倒にかたむけなければならない。

次に、それでは我々の味方とは誰なのか、敵が明確になれば、おのずと味方も明確になる。即ち、闘う日大生全てが味方であり、又、我々の闘いを支持し、共に連帯できる、全国の闘う学生、労働者、農民、市民が全て味方である。

だとするならば、決起していない学生はなんなのか？ 答えは、簡単明瞭である。すなわち、ほんの一部のカイライ学生、古翼学生を除いて味方であり、友である。なぜなら、我々の闘いは理にかなったものであり、正義の闘いである。そして古田に苦しめられ、古田に弾圧されることでは、我々と同じだからである。我々の闘いの意義とそ

の必要を、誠心誠意説得するならば、必ず理解してもらえらるだろう。この事は、全ての学生、市民についてもいえる。ブルジョア体制によって利益を得る一部の者以外はみな同じである。

我々の真の味方は、闘う同志であり、支配者階級に真向から闘いをいどむ労働者階級、人民である。従って我々は、目的意識的に、彼らとの連帯と、その内実を追求しなければならない。

二 敵の弱点、味方の弱点は何か

敵が古田であり、古田体制であり、帝国主義教育秩序であり、そして、日本帝国主義であるなら、そもそも、帝国主義社会には階級矛盾があり、敵内部には権力抗争と言う内部矛盾がある。それが敵の弱点である。

階級矛盾とは何か。即ち賃労働と資本の矛盾であり、一部有産階級が多数の無産階級を搾取し抑圧している事である。そして、この事を隠蔽するために、平和と民主主義、と言った。自からの矛盾を隠蔽し、正当化させる支配者階級の、その支配を存命させるためのイデオロギー、云うなればブルジョア・イデオロギーをもってして支配を貫徹しているのである。そして、その中でブルジョア自身、自からの存命を計るために、ブルジョア同志で抗争をくりひろげなければならぬ。

この事が日大においてどの様に表われるのか。即ち、ブルジョア体制下の全ての機構、全ての文化等々が、ブルジョア社会存命のために存在するのは既に明らかにされたが、日大が、その意味に

於いて如何なる位置を示めているかと云えば、ブルジョアに忠実なイデオロギーを有した、もつと云えば、中道の精神、日本精神を有した中級技術者を産業界に送り出し、彼ら自身がブルジョアジーによって搾取されているにもかかわらず反抗せず、かつまたブルジョアジーの手先となって労働者人民を抑圧し、搾取する事によって、ブルジョア体制を延命させると言う、現代大学教育とりわけ私立大学が突き進むべき道の最先頭に立っている。そして、この矛盾を暴露しつつある日大闘争を圧殺し、ありとあらゆる矛盾を含みながらも日大を存在せしめ、ブルジョアジーお気に入り大学ならしめなければならないのである。

そしてさらに、資本主義社会に於ける私学である以上、自ら資本の自由競争に打ちかつ、すなわち営利主義を追求しつつ、その存命をはからなければならない。

授業再開は、敵にとってこのための現実的急務なのである。なぜか。二百数十日間バリケードストライキが闘われる中で、授業は一切行なわれていない。だから、すべての学年で進級できないのであり、新入生を入れる事が出来得ないのである。それであるが故に、文理学部においても、刷新委員会が文理ニュースで『絶対に疎開授業は行なわない』などと公言していたにもかかわらず、理由にもならない理由をこじつけ、四年生の疎開授業を成東で行なったのだ。この事は、学校当局の欺瞞性を暴露するものでしかないし、しかも学校当局は、その犯罪性が大衆的に明らかとなり、自ら不利な状況におかれると分かっているながら強

行せざるを得なかったのだ。とに角、何が何でも四年生を卒業させ、新入生を入学させる事、この事が営利主義を貫徹し、日大を存命させる不可欠の課題なのである。授業料が入らず新入生の入学金が入らないと言うことは、個別資本である私学日本大学が崩壊する事であり、古田にとっては窮地に追い込まれる問題なのであり、政府ブルジョアジーにとっても、最も彼らに奉仕していた大学がつぶれる事は、帝国主義教育支配秩序の一角が崩される事でもあり、極めて都合の悪い問題なのである。

従って、ありとあらゆる欺瞞性、犯罪性を隠蔽し授業再開をしなければならないことが現局面における敵の最大の弱点である。

次に、古田・反古田と言う日大権力者内部の抗争がある。この点に関しては、一二月に新寄付行為が完成した事から、一応、敵内部の、とりわけ権力者内部の取り引きが成立し、また一方、雨降って地固まる式に古田が再度権力を握りかつ整備した感がある。しかし、権力者内部の矛盾は絶対に解消しないし、我々の闘いが偉大だったため、全共闘圧殺を狙う一時しのぎにすぎない。

さらに新たに、古田のあまりのやり方に不満をもつ部分が、敵内部から、とりわけ教授会の一部、助手講師会等々から出てきたことがある。この部分は、それ自身日和見性を有しているが故に古田と真向から対決する迄至らないが、敵内部の矛盾として注目しておかなければならない。こうした敵内部のみだれも敵の弱点である。

それでは、我々の味方の弱点とは何か。これ

は、我々主体側の力量の問題であり、闘う団結の量と質の問題である。

我々が六八年闘争の質を受け継ぎ、六九年闘争を新らたな、そして極めて高度な闘いとして成長させ、大学闘争それ自身の階級的任務を明確にしたにもかかわらず、国家権力の強権的暴力弾圧に対応し切れなかった点は、我々の戦線総体の弱点としてみておかなければならない。

そして、全共闘の問題を言うなら、各学部に対する官憲のバリケード撤去、闘争弾圧に対し、何ら対応していない事、この点に関しては、文闘委に於いてもしかりである。文理学部バリケード撤去に対し、文闘委が日大全共闘の最後の闘う皆を死守すべく、徹底抗戦を提起し、その方針が正しかったにもかかわらず、実現し得なかった点である。

組織防衛論なる極めて右翼的な、そして何の根拠もない方便を振り回し、あぐくのはて、政治焦点がないなどと吹聴し、戦線から逃亡した一部の諸君は、徹底的に糾弾しなければならないが、彼等の行動を許し、また現実的に徹底抗戦にとりくめなかった団結も問題である。二月六日の学部集会を大衆的力をもって粉碎し、バリケード闘争が、大衆的基盤によって保障されていたと言う、我々に有利な局面があっただけに、その団結の内容は全体の問題として問われなければならない。我々の切り拓いた日大闘争の偉大さ、また闘う任務が大衆化されていなこと。これは、我々の重大な弱点である。

三 敵の目的は何であり、攻撃は何なのか

敵が我々に攻撃してくるのは、敵に弱点があり、それを隠蔽するために、我々の弱点を突いてくるのが基本である。そして、敵が我々を攻撃し、圧殺しようとするのは、敵に目的があり、それを貫徹するために行なうものである。しかも、敵の目的には、矛盾がありそれを隠蔽しなければならず、それが攻撃の基調である。

既に明らかにされている様に、敵の弱点は階級矛盾を暴露される事であり、さらに現局面の最大の弱点は、ありとあらゆる矛盾を隠蔽し、営利主義を貫徹するために、授業を再開し、新入生を入学させる事なのである。

日大闘争が切り拓き、かつ突き出した問題は、ブルジョア教育、とりわけ大学教育の反人民性の問題であり、この事はとりも直さずブルジョア教育秩序の第一列である古田体制の反人民性、もつと言うなら、日本大学が存在している事自体の反人民性が問われているのである。日大闘争が、全人民的課題として闘われなければならないと言う革命性とは裏腹に、ブルジョアにしてみれば、如何なる矛盾があろうとも、ブルジョア体制存命のため、即ち、ブルジョアが支配者として、その支配を貫徹するために、ブルジョア教育支配秩序を貫徹しなければならない。つまり、古田体制を何が何でも延命させなければならないのだ。これが敵の目的であり、現局面を踏まえても、と具体的に言えば、授業再開を強行する事である。

敵の攻撃は、全てこの目的を実現するためにかけられてくるのだと言う事を見抜かなければならない。

この間の敵の攻撃は何か、つまり、四年生の授業再開であり、二・六の学部集会であり、そして官憲の手によるバリケード撤去である。そして当面予想される全面的授業再開である。

四年生の授業再開の内実とは何か。即ち、千葉県成東の地に於いて、アウシュヴィッツ収容所まがいの鉄条網に囲まれたプレハブ校舎で、しかも五〇メートルも離れていない所に、国家権力機動隊がひかえると言う、徹底的な暴力支配の下で行なわれたのであった。さらに、たった三泊四日の授業で一年間の単位を与えろと言う内容は、古田体制の、いやブルジョア教育の、その本質をうかがわせるのである。古田体制のもつ、その犯罪性欺瞞性、反動性を露骨に表わした授業再開は、四年生を卒業させる、ただそれだけのため、彼らの弱点を隠蔽し、すなわち就職をひかえ右傾化しやすいが故に我々の隊列の中で最も弱い部分である四年生に対し強行されたものである。この事は、一つに、四年生を卒業させ、新入生を入学させると言う彼らの弱点をなくすものとしてあり、他に我々の隊列、とりわけ四年生の隊列を分断させる攻撃としてあったのである。

二月六日の学部集会は何を意味するのか、学部集会開催の御膳立てとして極めて反動的であり、犯罪性に満ちあふれていたアンケート集めが行なわれている。日大闘争の本質を隠蔽し、所謂、無関心派学生の、単純発想性と無責任性に依拠し、

ほとんどの学生が授業再開を望んでいる等々と、闘争圧殺の口実を实体化しようとしたのである。

この点が二月六日の学部集会に、そのまま受け継がれたのである。しかも、成東に於ける四年生の授業と同様に、会場であった陸上競技場の周辺には、恥ずかしげもなく機動隊が配置され、また学校当局が雇い入れた右翼体育会系の学生をあらゆる通用門に配置し、文理学部の学生である事が確認されているにも拘らず会場に入られないと言う暴挙を行なった。そして更に壇上の周りを体育会系でうずめ、我々を一切近づけ様としなかったのである。まさにここに於いては徹頭徹尾、暴力支配が貫徹されていたのである。刷新委・教授会の無内容な発言が延々と続き、我々が発言するとマイクのスイッチを切ると言う破廉恥な事まで行なったのである。そして、四〇〇〇名あまり結集した学友の中で、右翼体育会系だけのたった七〇名の挙手をもって、授業再開が承認されたなど居直ったのだ。

すでに明らかになりつつある様に、ありとあらゆる矛盾を欺瞞的に隠蔽し、それを暴露し糾弾する部分に対しては、その暴力的支配基軸をもつて、徹底的に暴力弾圧すると言う、古田体制すなわち、ブルジョア支配体制の、その真髄を見る事ができるのである。

そして、この様な四〇〇〇名の中のたった七〇名という、ブルジョア法をもってしても、許されない内容を唯一の根拠とし、暴力支配まる出しの、機動隊によるバリケード撤去が、二月一八日強行されたのである。

国家権力の直接介入による闘争圧殺は、今全国的規模で各大学に行なわれている。この事は、全国大学闘争が、文字通り政治闘争として成長発展し、七〇年安保粉砕に向けた日本階級闘争の偉大な前進の中で、その一翼を担うものとして明確に登場しつつある事に恐怖した彼らの対応を意味している。我々の闘いは政府支配秩序を根底から揺り動かすものであり、古田体制が、その支配秩序の象徴である。同時に、日大全共闘が、六九年闘争を、その先頭に立って切り拓いたが故に、敵は日大闘争圧殺に総力を上げてきている。文理学部に対する官憲導入もその闘争破壊攻撃の一環であったのだ。

敵の攻撃は、彼らの支配秩序を回復するためのものであり、とりもなおさず古田体制を存命させる事であり、授業を再開する事に一切が収約される。そして、それは、敵の弱点をカバーしつつ我々の弱点にかけられてくるのである。

それならば、我々の闘いは、我々の弱点をカバーしつつ、敵の攻撃を粉砕し、敵の弱点を攻撃しなければならぬ。

第二節 闘いの展望と任務

方針

既に敵と味方は誰なのか、敵の弱点味方の弱点、そして敵の攻撃は何であることを明らかにしてきた。従って我々の方針、展望は次の様に定められ、切り拓かれる。即ち、味方の弱点を強化し、敵の攻撃を粉砕し、敵の弱点を攻撃する。この事

によって必然的に勝利の展望が出てくるのである。

敵の弱点は、そもそも階級矛盾をもっており、その事はとりもなおさず、闘う人民大衆によって放逐されると言うふうに歴史が証明している。しかも、六九年大学闘争が切り拓いた局面は、まさにこのブルジョア社会内における、大学それ自体の反人民性、反階級性を全人民の前に暴露した極めて偉大な闘いだった。一月闘争で労働者と明確に連帯する事が出来たのは、以上の事の具体的実践に外ならない。大学がもっているありとあらゆる矛盾、図書館がせまいとか設備が悪いとかそうしたもののから、大学運営の根本問題までの矛盾は全て資本主義社会が根底的もっているブルジョアジーと、プロレタリアの矛盾と云う階級矛盾の副産物であったのだと言う事である。

しかも当面する敵の最大の弱点として、こうしたありとあらゆる矛盾を隠蔽し、古田体制の存命を図る事、即ち、闘争を圧殺し、授業再開をいかなる手段をもつてしても強行しなければならぬとしてある以上、我々の闘いは、我々の隊列を強化しつつ、授業再開策動を、実力闘争をもってし、あらゆる手段を駆使して粉砕する事である。これが古田体制を窮地に追い込み、九項目貫徹の勝利の展望を切り拓く道なのだ。

我々の隊列を強化する問題とは何か。我々内部を強化し、その団結の環を一步一步拡げていくのである。今の闘いが、まさに闘う全体の側に対し、ブルジョアジーの側に立つのか、それとも労働者階級人民の側に立つのかと、突きつけてい

るところまで激烈を極め、きびしく、一切の日和見性も許さないものとして発展して来ている。

この様な中で、日大闘争は闘うが、共産主義は憎い、だから闘かえない等々と、真剣に考えている部分が出て来ている。この事は、この闘いに入る前、一部の諸君を除いて、二十年近く、ブルジョア社会に生きて来た以上、至極あたりまえの事である。しかし、この事を合理化してはならない。何故なら、たしかに二〇年近く、ブルジョア・イデオロギーに毒されている以上、観念的に、共産主義は悪いと教しえ込まれているからだ。共産主義とは何か。むしろこの様に問題を立てるのは誤まりである。社会体制内に於けるありとあらゆる小さな矛盾、これを一つ一つ解消していく、これが闘いであり運動であるのだ。日大の古田体制と言う矛盾、これを徹底的に究明していくと、意識しようとしまいと必然的にブルジョア体制の根本矛盾、階級矛盾に突きあたるのである。そこには、日大闘争は闘えるが政治闘争は共産主義運動だから闘えない等々と言う弁明は許さない。むしろ、もっと謙虚な態度で、自己の問題意識にとらえられ、一つ一つの矛盾を追求する。その事が闘う事であり、最も主体に問われる問題なのである。古田は倒さなければならぬ。只それだけである。そのためにこそ、ありとあらゆる学習をする事、それが自己の発展であり、団結総体の発展強化である。自己の問題意識に帰れ、これが闘いの原則である。

一月東大闘争で切り拓かれた革命的現実、今まさに全国的に継承発展されつつある。現在京都

大学で熾烈に闘われている入試粉碎は、その実体である。敵階級の攻撃が、ただ単に日大闘争圧殺、大学闘争圧殺のみでなく、明確に全人民に対する攻撃としてかけられている。だとするならば、我々も闘う人民の課題として、戦列の拡大を具体的に闘う中から準備しなければならない。日大・東大に引きつづき、中大、電通大、東教大と連続的になされた官憲導入は、闘う部隊の革命的連帯を促している。そして敵の攻撃に対しては、我々の反撃を、敵の弱点には、我々の総攻撃を準備しなければならない。

現在、極めて苦しい中であって、文理、芸術、農獣医等々で奪還闘争が展開されている。また中央大等々、あらゆる大学で反撃の準備が行なわれている。こうした闘いを、更に多くの大学に、そして、労働者階級人民に波及させていかなければならない。とりわけ地域労務者との連帯、市民との連帯、これが我々の闘いに問われている課題であり、この闘いは、地域的にかつ、同時に一斉蜂起をもって、文字通り、労農学の総反乱として闘い抜かれなければならない。

この事が克ち取られてはじめて、敵の弾圧体制をはねのけ、敵の攻撃を粉碎し、我々の攻撃を準備する、闘争勝利の具体的展望が切り拓かれるのである。そしてさらに、この事こそが、六九年大学闘争が切り拓いた偉大な内実を継承発展させる事が可能なのである。

敵の攻撃が授業を再開する事であるならば、我々の総力をあげて、あらゆる闘う部隊をもって、授業再開を粉碎し、全学バリケード封鎖を貫徹

し、闘う根拠地を敵に対する攻撃の問題として創らねばならない。これがあってはじめて、古田体制打倒、九項目貫徹が克ち取れるのである。

第四章 日大闘争の意義と本質

「日本大学合理化改善方策案」(一九五八年)
以来一〇年間にわたる古田体制に抑圧されてきた日大一〇万学生は、三四億円使途不明金問題を決定的契機に、ついに耐え難き矛盾の圧迫に抗して敢然と厥起した。一たびこじあけられた突破口は一挙に拡大し、せきを切った怒濤のように闘いは進んだ。おそらく、どのように巨大な大衆運動を経験した人でも必ずや目を見張らずにはおけないような、それは素晴らしい進撃の一日一日である。

日大闘争は、開始されてから現段階まで、鼻もぢならない貴族趣味の、一かけらもない学生の学生としての精神の自由さと直裁さに貫ぬかれた闘いである。気持ちのよいほどおろかであり、しかし同時に、人をして慄然とさせずにはおかないような必死の決意を表出させている。

われわれは、今日の極めて困難な局面を闘い抜き、自からの戦列を打ち固める上で、昨年五月下旬から六月上旬の初期の闘いをふりかえりながら決意をあらたにしなければならぬ。いいかえれば、六八年日大武装ストライキ闘争が、六九年に引き継がれ、二月一日の「日大闘争勝利、労働

者、学生、市民五万人大集会」における秋田明大議長「日大闘争永続化宣言」に見られる徹底的闘争のその全体像を総括し展望する核心的視点を五・六月闘争は与えているといえるのである。

九・三〇以後古田は学内派閥の統括を完成し、反古田派を政治的に掌握することをもって、こんにちの攻勢をかける学内的条件を準備してしまっただのであるが、古田はいまや額面どおり日本大学にとって不可欠の存在となっている。しかし重要なことは、日本帝国主義による大学の直接支配のためには「古田のような男」と「古田の日大」とは絶対不可欠のものとなってしまっているのである。もはや古田は単なる人格ではない。日本帝国主義の大学問題「解決」のための具体的典型であり、導きの現実的な基準なのである。この古田と古田体制との持つ階級的意義を深く知るためにも日本大学の歴史と本質を明らかにし、日大闘争の意義と本質を説明していこう。

第一節 日大闘争の血の道標

一九四五―四八年にかけて、全国の大学におけ

る学園民主化の闘いの最先頭に立って、日大は戦争加担者Ⅱ反動教授追放をはじめとし学生自治権確立の闘いを貫徹し通しながら、全日本学生運動再生の栄光ある先頭部隊としての拠点を形成していった。それらの闘いは、だが実際には学生の内部分裂の中で強権的に撲滅させられていった。それ以後一〇年間の学生の闘いは、五〇年反共御用学者イールズの学内受入れ、五二年日大合理化企画委員会発足、五五年合理化企画案発表Ⅱ実施というかかる一連の日大反動教育政策の貫徹を、最後の一線においておし進めんとし、大学自治の腐朽化傾向をその内的生命力の鼓動において阻止する学生自治権確立のための不退転の闘いであったといえる。日大改善案に先行する五七年経済二部学生のストライキⅡ自治会の完全掌握、全学連正式加盟に対する右翼松葉会を使つての弾圧的絞殺、五八年日大改善方策案をめぐる当局と学生の抗争とその挫折という形で反動と反逆の織りなす過程は、日大改善案をもって、学生のありとあらゆる息の根を無慈悲な暴力で断ち切ることに一応成功した。しかしそれが、今日の日大の驚くべき腐敗的構造と反動的骨髄と確立する出発点と

なつたのである。

日大の六〇年安保闘争は、大学当局の日大安保共闘会議の学生に対する苛烈な弾圧によって一敗地にまみれた。日大教育事業後援会発足（六二年）、数学科教師追放（日大事件、六二―六三年）などの攻勢を通じて、古田支配体制は大きく進行していったのである。

文理、商学部等の応援団闘争（六六年）羽仁五郎講演会弾圧反対闘争（六七年）日高六郎の講演会をめぐる闘争（六八年）と闘いは、ようやくにしてひきおこされていった。だがそれらの闘いは一学部だけの闘いか、せいぜい二学部の闘いではないかありえず、日本大学の総体に立ち向う全学的闘いへと発展せず、尻すばみになっていったのである。

まさに戦後二〇数年間にわたってくりひろげられてきた「反動と反逆」の歯車は、とりわけ五八年を前後する頃から今日までのその過程は、われわれの臍腑を鋭くえぐる。日大学生運動の過去は絶望的悲哀のかげりをもってきた。そうした血のにじむような敗北の歴史のなかで沸々と燃えだぎってきた怒りと反逆の熱は、いま六八―六九日大闘争によって巨大な方向性を与えられたのだ。いや、われわれは、過去の幾多の敗北の史実を、日大の革命的変革にいたるその大道の一つ一つに打ちこまれた「血であがなわれた道標」としてとらえかえし、その到達点をみずからの到達点とし、その挫折をみずからの挫折とし、それらすべての総決算をかけてこの日大闘争を発射させたのだ。過去の不屈の闘いがなかったとしたら、この

日大闘争はなかったのだ。

第二節 営利主義と恐怖政

治的学生支配

日本大学の暗黒と反動は、日大合理化改善案に源泉をもっている。イー ルズの学内受入れ、合理化企画案発表Ⅱ実施と相ついで打ち出されてきた反動的教育政策の一層のエスカレートとして日大改善案はあった。それは大学教育の非学問的粗放化と大学行政機構の独裁的専一化Ⅱ恐怖政治的学生支配とを相互補完としながら実体化しているものであるが、その内実是他の私学に比しても驚くべき腐朽的性格をなすものであり、暗黒と反動の巣窟と呼ぶより仕方のないものである。今日の日大の腐敗的構造と反動的骨髄の集約はすべて日大改善案にもりこまれていく。ではこの日大改善案はいかなる本質といかなる位置をもつものなのか。

第一には、日大改善案をもって、日本大学は日本帝国主義の大学改編の突破口の位置を占めていることである。

五〇年代の日本資本主義の高度成長政策にともなう労働市場の変化に対応して、大学の資本制社会的位置の低下はおしすすめられた。いわゆるマスコプロ化という私学における学生の量産的育成は中級技術者の大量的要請にそって理工系学部を肥大化し、管理部門の膨大化による中級サラリーマンの大量的要請にそって文科系学部を画一化させるものとして、産学協同が音をたてて進行するこ

ととなるのである。

まさに日本大学は他の私学に先がけて一早くこの日本帝国主義的要請に応え、すでに一九五八年段階で産学協同を確立したのであった。その意味でも日大改善案は極めて反動的であるといえる。

だが問題はこのように日本帝国主義の経済的要求に忠実に応えることをすればするほど日本大学の内部の悪矛盾は激成され全く逆の結果しか生み落さなかったということにある。

大学と学問の資本への隷属、国家統制への屈服の過程は日本大学にあっては極度に畸形的におし進められた。つまり大学当局の学問放棄の過程は、古田をはじめ職員あがりの教授を上部へおしあげることを結果し、ブルジョア的な意味でのアカデミズムさえことごとく喪失した体制を生み出したのである。産業社会の要請をうけいれるべき制度的改編は一応なされながらもその過程は畸形的であったが故に、その内実、思想的改編は驚くほど貧弱であったのだ。

ブルジョア・イデオログとしては低水準な教授。学生を資本主義体制に思想的に順応化させていくことのできないイデオロギー。こうした事態を解決しなければ日大改善案の目的を達成するわけにはいかない。いいかえれば、産学協同を「合理的に」おしすすめないような、そうした産学協同、それが「日大改善案」の重大な矛盾であった。

この矛盾の反動的補強が、徹底的な営利主義の追求と恐怖政治的学生支配とにもとめられたのであった。

従って第二の問題は、徹底した営利主義にある。アカデミズムの喪失を、外から補なうための有名教授の覬誘に膨大な金が流れる。古田体制といわれる学内支配機構の確立のために、想像を絶するほどの汚職金が乱れ飛ぶ。かつまた貧乏大学からモデル校・日大になるために費やした資金、直接には設備投資資金の穴うめの必要が増大する。このような中で営利主義の徹底化が必然化していった。が、営利主義が一たんとられるやいなや、それは目的化、学生からの授業料における大衆収奪の強化はますます激しく制度化していった。大衆収奪の強化設備投資・校舎増築は、ついに「マンモス日大」を誕生させた。そうしてその底辺では、学問の非学問化、大学の非大学化はつき進み、いかなる意味においても「大学」とはいえないような日大がつくられてきたのである。大学運動におけるこうした資本家的方法の採用は、「株式会社日大」と巷で公然とうわさされるような機構を構造化していった。その環が各学部、統列合Ⅱ独立採算制にあることはいままでもない。日本大学はこうして本部を基点としながら腐敗と汚職に満ち満ちた、暗黒の巣窟と化したのである。つまり営利主義は古田の古田の独裁的専一支配の手段・テコとして貫ぬかれていたのである。

他方、第三の問題は恐怖政治的学生支配にある。心の底から「資本主義のために働くんだ」という思想をもった学生をつくることができないとすれば、暴力的弾圧でもって資本主義に屈服する学生をつくらうとするのは、けだし、当然である。右翼御用学生の量産的育成と学生自治の破壊

は、ますます拍車がかけられ、恐怖政治的支配を学生におしかぶせながら「去勢された」学生を大量につくりだし、かくすることによって、資本主義に無批判的にくみこまれる学生を送り出そうとしたのである。六〇年安保に対する日大当局の対応をみるまでもなく、学生への自主性の圧迫は耐え難きものであった。右翼学生は勇然と学内をまかり通り、少しでも資本主義に、或いは日大の現状に抵抗を感じる学生はすみの方で小さくなっていなければならぬという事態は「恐怖政治」と呼ぶ以外にない。

こうした営利主義と恐怖政治的学生支配は、一体化して進みながら、日大反動教育政策は自民党政治との癒着を深めつつ、日大教育事業後援会（六二年発足）にみられる如く、日経連・独占資本との結合をいよいよ緊密にしていたのである。（後援会のメンバーは日大出身者ではなく鹿島守之助、小坂徳三郎、石坂泰三、五島昇などの日本財界の有力なそうそうたる顔ぶれである）

第三節 古田体制の根底的

破産

かかる日本大学の根本的矛盾は、一般的には、資本の論理と運動の矛盾にはかならない。だが、三四億円使途不明金問題として、膨張しきった矛盾は深刻な表現をみせたのである。しかもより深刻なことは、古田がいわゆる「総合大学院大学構想」を準備せんとしたまさにその矢先に、かかる矛盾を露呈したことなのである。それは従って、

古田体制下における管理運営ならびに教育政策の破綻を示すとともに、日本帝国主義の大学・教育政策のゆきづまりを鮮明にさせているのである。

独占資本と癒着する日大は大学・教育の国家統制を忠実に採取する大学として、最たる範である。それ故に、自治破壊を主体とする弾圧のもとで腐朽しきった巣窟として、巨大である。確かに古田体制はその純化として、堅牢さを誇り完璧さを謳歌してきた。だが先にも見たように日大大学の根本的矛盾は、明らかに、装おいても新たな次の近代化路線を必要としていた。

ところで六五年に立法化がもくろまれた大学設置基準省令化と教員免許法改悪は、今日の大学・教育への帝国主義的攻撃の方向を最もよく示すものである。いわゆる教育の複線化と呼ばれているものであるが、その内容は、(イ)学科Ⅱ講座制大学（大学院大学・旧帝大を中心に技術革新を生み出す科学・技術の創造とブルジョアイデオロギー・エリート養成機関）(ロ)学科Ⅱ学科目制大学（戦後新制大学・私立大学・中級技術者と中級管理職の大量的養成機関）(ハ)学科Ⅱ学科目制大学（教員養成制の大学、いわば大学の最底辺としての最も激しい攻撃がかけられており、大学の分断、再編成の突破口に位置している）というものである。

この本質とするところは、おりしも六五年日韓条約を締結し植民地帝国主義に転換した、日本帝国主義の政治的側面からする大学への直接的な要請なのである。つまり、高度成長期のような「教育投資論」にもとづく、単なる資本の経済的側面―利潤追求のための労働力確保からの攻撃ではな

く、外に対する侵略に呼応して、内にむけての強権的反動支配確立のための攻撃としてあるのである。端的に言えば、イデオロギーとゲバルトにもとづく大学改編なのである。

さて、古田体制もまた、日本帝国主義の深まりゆく体制的危機に際して、日本大学の新たな改編の野望を燃やさんとしたのであり。それが「総合大学院大学構想」なるものである。ちょうど、五八年にいち早く「日大改善方策案」を引っさげて日本帝国主義の要請に忠実に応えたように、だがこの野望は使途不明金問題によってミソをつけられ、日大闘争の大爆発によって完全に破綻してしまったのである。いわんや、科学・技術のトップレベルの創造やブルジョアイデオログ・エリート育成などは日本大学においては夢物語に等しい。加えて、日本帝国主義の大学の三分断にむけての攻撃は、その突破口たる教育系大学への攻撃が——例えば昨年の教育三法の廃案——全く思い通りにいかないように、大きく動揺している。従って日大闘争は、かかる古田と日本帝国主義者の攻撃に優れて先制的な打撃を与えているといつてよいのである。これほど古田にとって深刻なことはあるまい。

日本大学の歴史と本質の中で現われてきたように日大闘争の意義と本質は「古田と古田体制打倒を」というスローガンにこめられた意味、すなわち、日本帝国主義による大学の直接支配を許さず大学物神を紛々に打ち砕くことであるだろう。同時に、五大スローガン九項目完全貫徹も、物取り主義的偏向に落ちいることもなく、日本大学の歴

史と本質の中から生れてきたものとして受けとめ、古田体制死滅の直接的武器へと有効に位置づけなくてはならない。

第五章 日大闘争をとりまく諸情勢

△はじめに▽

反対は通告にしか過ぎない
粉碎はすくなくとも行動だ

反対から粉碎への飛躍はすばらしい
たとえ一〇年がかりであつたにしても

具体的実践の烽火はすでに打上げられている

權威の顔を角材でメッタ打ちせよ

秩序の顔に投石の雨を降らせよう

闘いの烈火の中で普遍的真理の眞実があかあかと照らし出される

若い激流がいま渦を巻いて列島を洗いはじめた

(山田哲)

日大闘争、とりわけ腐敗墮落しきつた古田反動体制(日本の反動大学の総本山を支える部隊)に対し、敢然と叛逆し闘い抜いてきた二五〇日間余りの武装ストライキ闘争は、現在の日本の教育全般(ブルジョア教育制度等すべての体制的制度)の矛盾を鋭くえぐり出し、旧体制から新体制へ脱皮すべく助産婦としての役割を果たしている。この

ような中であつて、我々を取りまくすべての状況は激しく流動している。我々の突き出している不屈の実力闘争に対し、敵は恐れをなして、狂悪なありとあらゆる弾圧を強いてくるだろうし、友は喜びをもって受け入れ闘いに呼応し、闘いの光明を見出し、更なる前進を続けるであろう。

日大闘争は、このように二五〇日余りの武装ストライキ闘争を経る中で、数々の教訓を闘争・総括・闘争の過程で獲ち取ってきた。我々が誇りをもっていることは、この闘争が規模といい、激しさといい、期間といい、これまでの学生運動の殻を大きく打ち破り、怒濤の如く進軍を開始してきた事実である。これは今後とも限りなく続くであろう。日大の闘いが今日のように幅広くなりえたのは、大衆の意志を反映できる指導部の発足と、その指導による妥協なき闘いを推進していったことが大きな要因であり、それ故、このような闘いが燎原の火の如く全国に燃え広がら、反動教育体制を根底からくつがえすべく闘い——帝国主義大学解体、とりわけ最も強固に推進してきた古田体制打倒支配基軸解体の闘いとして位置づけられるだろうし、その最も根本的な矢である五大ス

ローガン・九項目完全貫徹の闘いとして組み立てられていることを確認する必要があるだろう。

かような闘いを担う基盤として、多くの闘う学生、労働者、農民、市民の強い連帯があり、またそれを推進させてくれる反面教師としての敵当局の弾圧攻勢(例えば帝国主義的教育再編等)がある。したがって、これらの日大を取りまく状況、とりわけ闘う学友を取りまく内外の状況を分析かつ報告しておきたいと考える。

内外の情勢——日大闘争の現局面は拠点を奪われ、脆弱化した組織、依然として打倒されずに居座っている古田反動理事会等云々といわれるように、極めて困難な状況を作り出している。だが半面、これは我々に対して逆により強固な隊列と、持久的な猛烈な攻撃を用意させ、勇気を奮いたたせる以外のなにものでもないことを物語っているではないか。さすれば、我々は必死になつて組織化するだろうし、新鮮な血液を注入し新たな決意をもって更なる前進を克ち取っていくことを証明するならば、状況は我々の不屈の闘いによつて、いくらかでも有利に展開されるであろうし、日大闘争勝利の的に向かつて、怒濤の進軍を領導す

る偉大なる光明をさし示していることを高らかに宣言しようではないか。

それに基づいて、状況（情勢）を次のように分類しておこう。

I 国際情勢

(イ) 世界はどのように動いているのか

(ロ) 各国の青年学生労働者の闘い

II 国内情勢

(イ) 日本帝国主義の動向（攻勢と矛盾）

(ロ) 日本階級闘争の現状

III 日大闘争を取りまく全国大学闘争の課題

(I) 国際情勢

(イ) 全般

帝国主義の不均等発展法則に基づく矛盾の激化は厳しく始まっている。それは米帝国主義の圧倒的な世界支配体制の枠の中から、日本、仏、伊、英等の各国帝国主義の抬頭により、政治的にも経済的にも米帝国主義に打撃を与え、かつ弱めていく作用をも果し世界再分割へのスタートを切っている。それらの顕著な例は「(ロ)各国の闘い」の中で詳細を譲るとして、米帝国主義を始め、各国帝国主義の帝国主義確立へ向けての政治攻勢およびプロレタリアート人民への抑圧が開始されている。かような攻勢に対し、人民は反抗し、かつ反抗の中で帝国主義の本質に向けての進撃を開始するのである。

帝国主義権力とブルジョアジーは、帝国主義の矛盾の発展の中で、再び帝国主義を確立するため

の野望に燃える。そうしなければ彼らの延命と存在はありえないのである。

世界資本主義の矛盾は深化している。とりわけ、米帝国主義の政治的破産がベトナム革命戦争をみても明らかになっている。四〇年ぶりの金融恐慌は資本主義世界におけるドルの「覇権」を激しくゆさぶり、米帝国主義の侵略軍隊が四万五〇〇〇人から五五万人以上、軍事費もそれに比例して年間一億ドルから四〇〇億ドルにも飛躍拡大している。これらの出費を補う意味でも、ありとあらゆる「強心剤」を試みるのが帝国主義者の常であり、御多分にもれず、こうした経済・金融危機を政治的には残酷な搾取による超過利潤の膨張によって乗り切ろうとしている。彼らがいくらあがいても、言うまでもなく、ベトナムにおいても、軍事的にも政治的にも敗北の一途をたどり、今まさにベトナム人民の勝利は全く明らかとなりつつある。これに動揺したブルジョアジーどもは「ポスト・ベトナム」「ベトナム戦争終了後における復興への協力をする」等々ほざいている。

そして、世界各国の帝国主義者のあがきは、アメリカを始めとして、露骨になってきている。その証拠として、(ロ)で述べる各国の闘いがあるであろう。帝国主義と人民の矛盾が鋭くえぐり出されていくなかで、全ての帝国主義がその政治的破産を宣言されているのである。文字どおり、彼らのあがきが最後のあがきとなる日は、そんなに遠くはないことを確信する。

一方、社会主義陣営においては、「中ソ論争」

以来、平和共存路線を歩むソ連とプロレタリア文化大革命における徹底した闘争批判改革を行ない、プロレタリア独裁を堅持する中国との熾烈な闘いが展開されてきた。これらの熾烈な闘いの中で、ソ連のチェコ侵略があり、中国のプロレタリア文化大革命が革命派の手により收拾段階にきている。このことは、まさしく片や反革命現代修正主義の醜い破産と同時に矛盾を堂々と露呈しており、片方はプロレタリア独裁を堅持し、国際共産主義運動のその先頭に立って、ベトナム革命戦争を始めとする各国の闘う人民の強固な砦として位置づけられるであろう。

現在、国際情勢はフランスの学生が切り拓いた五月革命、そして、その大きな基点となったプロレタリア文化大革命やアメリカ黒人解放闘争があげられる中で、大きな局面に到達している。それらはベトナム革命戦争を始めとする各国の労働者・青年学生との闘いを象徴し、国際階級闘争の広汎な昂揚を意味しているではないか。

文字どおり国際階級闘争の昂揚局面を我々は迎えている。それは帝国主義国及び現代修正主義国においても同様だが、帝国主義国の内部の階級闘争は、帝国主義間の矛盾に対する抗争の発展、民族解放闘争における抵抗によって拡大しつつあり、それは、「実力闘争」として展開されている。文字通り、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ、ヨーロッパにおいては階級闘争の昂揚が、すでに人民戦争の開始として発展してきていることを付け加えておく必要があるだろう。

(ロ) 各国の青年労働者学生闘い

イタリア：腐敗したブルジョア教育制度と当局の学生運動と当局の学生運動弾圧に反対するイタリア学生運動の波は、大学から高校へと受け継がれている。イタリア各地で（ボローニャ、ベニス、シシリ等）校舎設備拡充並びに学園における民主的権利の保障の要求は、武装ストライキ闘争をかちとり果敢に闘い抜いている。

スペイン：マドリード大学にも腐敗しきった反動教育制度と学生運動弾圧をますます強権的にエスカレートさせている反動当局に対して、断固たる実力闘争を堅持し、当局の「教育改革」に関する『白書』なる近代化路線をもの見事に粉碎している。

フィリピン：六九年の年明け以来、フィリピン各地の労働者、教員、学生は反動当局による労働者への不当な迫害に反対し、腐敗した教育制度に反対し、待遇改善を断固要求して波状的にデモやストライキを行なって闘っている。

西ドイツ：西独支配者が人民の闘争をいっそう残酷に弾圧するために、ファッショ的法律——「予防逮捕法」を計画し決定したことに対し、西独の青年市民は断固として抗議のデモを展開した。西独当局のこのようなファッショ的陰謀は広汎な人民大衆の怒りに満ちた抗議を引き起こしたのである。

アメリカ：戦闘性に富む米国の黒人学生の指導のもとに、米国の大学専門学校の進歩的運動は、いま急速に全国各地に広がっている。連日来、全

米至るところの州で、黒人白人の学生はそれぞれ校舎を占拠し、デモを行ない反動軍隊、警察とわたりあい、教育の分野で米国反動支配集団が推し進めている人種差別政策に毅然と闘っている。

(Ⅱ) 国内情勢

(イ) 日本帝国主義の動向（攻勢と矛盾）

日本帝国主義は、六〇年代に帝国主義を復活させ、七〇年代の安保・沖縄に追求している。しかしながら、日本帝国主義とブルジョア階級がこれまでのように人民を抑圧し搾取し、世界資本主義の一員として延命の道をたどることは非常に困難な方策である。

その一つとして、アジア人民の革命闘争があげられる。この人民の闘いを直接弾圧することは、日帝の現在の力量では全く可能ではない。それ故に日帝と日本反動派は更に国内の反動化を図り、米帝とアメリカ反動派と深く結合せざるを得ない原因がある。そして、その中においてアジアへの経済侵略（既に開始している）と政治支配権を形成しつつ、帝国主義軍隊（自衛隊の強化）と国内抑圧体制（階級政策）を貫徹することに必死になっている。

更に、第二点として日帝の市場が、アメリカとアメリカ中心に置いている現状からして規制され、日米同盟を強化させ、かつアジアにおける反動体制を擁護することが、日帝を存命させる基礎となっている。そして、日本帝国主義の位置は、原料供給地及び独占市場の確保はアジアにおいて

他にはないため、この中において、日帝は「アジアの盟主」たらしめ、帝国主義軍隊形成を図り、アジアにおける政治経済圏の確立を図ろうとしている。こうして日米反革命同盟（安保体制）の強化と、アジア各国の反動派との結合を徹頭徹尾推進するであろうし、それを基盤としつつ国内においては、階級政策の貫徹を露骨に計るであろう。現在の日本は戦前のように、東南アジア侵略を開始し、「大東亜共栄圏」を再びつくろうと狙っている。六五年日韓条約を皮切りとし韓国・台湾・フィリピン・タイ・ビルマ・インドネシア等へと経済侵略を行なっている。

この侵略は米英帝国主義と欧州列強との抗争の激化による、A・Aの再分割の開始の局面に、日本独占資本が生き残るためには帝国主義となつて、東南アジアを日本の支配下におくことである。それ故に遅れをとった日帝は、急速に東南アジアへの侵略を開始したのである。

しかしながら、日本はアメリカの占領の下で帝国主義軍隊を解放させられ、自衛隊という名の軍隊を持つようになったが、未だに完全な侵略軍隊を持ちえてない。だからこそ、今日日本人をして東南アジア人民と敵対させ、東南アジアへの来たるべき軍事侵略のための国内動員体制（右傾化——徴兵制の思想的基盤）を作ろうとやっきになっている。

そして、経済侵略に伴う国内合理化——金融寡占体制の強化、集中合併とを合わせて、日帝の国内政策（階級政策）となり、それが教育にもはつきりとあらわれている（教育主義的再編）こと

を確認する必要がある。

最後に、日本帝国主義自身がもつ矛盾は、世界帝国主義の矛盾の一側面に他ならないことを付け加えておく。

(d) 日本階級闘争の現状

日本階級闘争の現状として次のように項目別に分類する。これらの基調となっているのが日米反革命同盟であることは周知のとおりである。ブルジョア政治委員会をして安保・沖縄・大学問題が政治生命になっている昨今、日本人民の各分野における闘いを列記したい。

(a) 安保・沖縄に対する闘い

安保粉砕・沖縄解放は、六〇年代から七〇年代全般にまたがる日本階級闘争の戦略課題であることを踏まえ、現局面を述べてみる必要がある。

沖縄は、東南アジア反革命軍事戦略の中枢として日米両帝国主義の諸施策の枢要をなしている。ベトナム侵略戦争に直接投入されるB52戦略爆撃機の沖縄駐留は、沖縄人民に対し更なる犠牲を強いつつ米日帝国主義のどちらの管理下におくにかかわらず、そうした機能を定着化することなしに、反革命軍事戦略を全うしえないことを意味しており、それに沖縄の「B52撤去」「基地撤去」の闘いは単なる沖縄次元の闘いではなく、米日両帝国主義のアジア反革命軍事戦略に対決する闘いであり、激烈なるアジア人民の闘いと連帯した国際主義的な闘いではない。

安保闘争——日米反革命同盟を打ち破る闘いは、単に七〇年において闘われるだけでなく、七

〇年に始まり、七〇年代を貫く階級闘争の課題である。即ちそれは安保条約破棄などという条約上の問題だけでなく、日米両帝国主義の同盟を破棄する闘いであり、のみならず今から日米安保（その犯罪性は前項で述べている）そのものと闘いつつ、日米安保の実体と闘っていく形で準備されねばならない。

七〇年安保を迎える闘争過程の中で、人民の大衆闘争に発展することは避けられないし、かつまた、この過程を徹底的に促進せねばならない。その一つとして基地闘争、軍事闘争は政治闘争の高揚、戦闘部隊の形成の観点を通して、七〇年代安保・七〇年代階級闘争への強固なる土台を構築するものとし位置づけられ、同時に日米反革命同盟に対峙する政治的昂揚そのものである。日本帝国主義による沖縄永久基地化・核基地化の策動がなされている中での「沖縄解放」は、今や、日本階級闘争の尖端を担っており、佐藤反動政府の政治生命点となっている。日米帝国主義のアジア侵略の共謀現場である沖縄は、同時に、米帝国主義者が日本人民をほしきままに抑圧収奪している軍事基地（軍事的根拠地）でもある。民族解放の闘争が、ここでは米軍事基地撤去の闘いと結合している。

沖縄、板付、山田弾薬庫、佐世保、岩国、呉、伊丹、横須賀、横田、砂川、王子、三里塚、百里、長沼等々、基地闘争は燎原の火の如く全国各地に火の手をあげている。大衆闘争は、基地撤去のみならず、軍事輸送阻止、米軍の補給、療養、休養の阻止へとその闘いの範囲を拡大していった。

いる。

基地撤去の大衆闘争は昨年来、急激に拡大し、連続的に展開されてきた。量的のみならず質的にも急速に前進している。

その一つとして、既成左翼と反革命修正主義者は基地撤去闘争を、国家権力の許容範囲内にとじこめ、ピクニック兼用の形式的で効果のない「デモ」に変え、日米反革命同盟の維持に奉仕してきたのである。佐世保、王子、三里塚、忍草、板付、そしてあの偉大な人民戦争の道を切り拓いた新宿闘争等の基地撤去、転送拒否の大衆行動は、かつての内灘や砂川の決死の不屈の実力闘争の光輝ある伝統を復活させ発展させた。

又、第二点として基地闘争は「土地をかえせ」から安保体制粉砕に内容をたかめた。その顕著な例として三里塚闘争を取り上げる必要がある。

(b) 農民の闘い（三里塚闘争）

三里塚闘争は、いま自然発生的な反権力実力闘争の段階から、二重権力を構築する地域的拠点の創出への初歩的な過渡期にある。具体的にいうならば、現在の反対同盟の組織性にみられる保守的な結びつきを土台とした「半封建的なブルジョア民主主義組織」としての組織性格を実力闘争の一層の量的質的发展の中で解体させてゆき、革命的な再編を促進する「組織的再編」の時期にある。これは何も農民に限らず、労働者学生のものにも言えることである。

ここで三里塚新空港のもつ意味を若干提起する必要がある。新空港、三里塚は侵略基地建設であり、四次防によみがえる帝国主義軍隊の基地であ

ることこそ、佐藤政府が不退転の決意でもって要請している由縁である。ベトナム侵略戦争に象徴される侵略と、反革命の日米反革命同盟の策動、就中、日帝の東南アジア侵略の野望の侵略軍隊の確立としてとらえられるが、それらを我々は日帝の動向から考察してゆかなければならない。

△第一点▽アジア侵略の要としてあるところの三次防の確立から四次防Ⅱ日帝の常備軍建設の具現化としてもたらされている。新空港を東南アジア侵略の拠点（経済的にも軍事的にも）とするところに政府・支配者の野望があるのである。

△第二点▽世界航空資本の競争の激化の矛盾としてある。即ち七〇年代航空業界は熾烈な競争に勝ち抜くことが至上命令としてあり、このことは日本の航空業界の資本再編を余儀なくされ、同時に日帝の未だ完成されていない通信、運輸部門の合理化への課題に照応するものである。

△第三点▽ベトナム侵略戦争の激化があげられる。米帝にとって戦局の悪化は大量の増員派遣と補給を必要とし、砂川基地拡張・横田基地が膨張状態にあるため羽田空港の使用、沖縄のB52等々が明らかにになっている。これらは新空港設置の明らかな圧力となっている。

△第四点▽以上の三点を踏まえて日帝が植民地政策を押し進める過程で、日本の農民層を分解させ、大量の都市底辺労働者を輩出させるかたわら、残った大農経営者養成を目指し、北総開発がこれを示し、農業分解Ⅱ農村を破壊する

ことにある。

つまり、この三年余の三里塚闘争を通じて、この闘争の総括を通じて、はっきりと現段階での闘争、血みどろの実力武装闘争をはっきりと保障しうる組織、新たなプロレタリア農民解放戦線の確立が要請されている。

(C) 労働者の闘い

現在、反戦青年委員会には、何千何万の労働者が結集している。これらの青年労働者は、説得や安全が保障されて組織されたものではなく、自ら人民解放のために進んで国家権力に体当たりをし結集したものである。これは、労資協調主義の支配下にある労働運動に対する「造反」であり、労働運動が国家権力奪取の基調にもとづいて前進することを助けていくからである。どこの工場でも、職場の経済闘争でもまた合理化闘争でも、もっとも戦闘的に闘う部分は、街頭の政治闘争に取り組んでいる労働者である。

既成の労組の概念の殻を完全に打破し、断固として実力闘争を堅持し、職場占拠闘争を果敢に取り組んでいる一労働者は次のように述べている。

「私達の闘いは自力更生を基礎としなければならない。労働者は闘わなければならない。闘う中で団結が生まれ、団結―批判―自己批判―団結をくりかえしていかなければならない。私達は本当に闘う仲間と一緒に闘っていききたい。すべての解放がなければ僕らの解放もありえないと思う。だから、アメリカ帝国主義、日本帝国主義への闘いも支持するだけでなく、自分達も実際に参加するよう取組んでいきたいし、基地撤去闘争、反動教

育粉砕の学生闘争とも連帯してゆき、三里塚の農民とも援農活動などを通じて交流している。職場闘争を基礎としながら、大衆的な政治闘争にも参加する中で、闘争の核心に触れていっているし、右傾化している労働運動に対して闘うことでもあると思う。決意を固め、犠牲を恐れず、万難を排して最後の勝利を闘い取ろう」と力強く語ってくれた。

これらの発言のすべてから、現在の労働運動の新しい展望が生まれているではないか。

出版・マスコミ労働者を中心とし「造反有理」が徹底的に行なわれてきた。総評や同盟、そして新産別等の一切の労働貴族、議会主義者、反革命修正主義者には目もくれず、自分自身の運命を自分自身の力に託す決意をもって、下層からの新しい力を作りあげていく闘う労働者の闘争に、全ての闘っている日本人民は労働者階級のそういう行動に期待している。

(Ⅲ) 日大を取りまく全国

大学闘争の課題

現在の大学闘争の突き進んでいる道は、学生を労働者と対立させるブルジョア反動教育を粉砕せよ――まさしく、これが全国大学闘争の普遍的課題であり、日大闘争の中で我々が闘っているのは「古田体制打倒」なのである。

しかし、目の前の敵「古田体制」も昨年十月二日の大学問題閣僚懇談会でも明らかにされたように、古田の背後には佐藤反動内閣が控えており、

即ち、それは日本資本主義社会、すなわち現体制なのである。

かような闘いであるが故に、我々の闘いは一般的に非民主的だから民主的にしようというだけの内容であってはならないだろうし、なに故に非民主的なのか、なぜ使途不明金なるものが出てきたのか。古田体制は一体何なのかということについては既に別欄で明らかにされているので重複することはさけない。

ここで我々は現在かけられている攻勢と、それをはねかえす学生との対決を明らかにする必要がある。

(a) 当局の攻勢

これは「教育の帝国主義的再編」という言葉に集約され、全国の多くの学生はこのブルジョア反動教育制度に反対して闘い抜いている。

教育の帝国主義的再編こそは、日本人民を白痴にさせ、日本人を東南アジア人民と敵対させることが唯一ブルジョアジーの目標であり、そのことは従順でロボット化した人民抑圧収奪の後継者を養成するという大きな卑劣なる使命をもち、とりわけ日本大学はその最も進んだ最高峰の大学として位置づけられてきた。

我々は教育の帝国主義的教育再編を次の三つに大まかな分類をすることが出来る。考える。それは即ち、

一 教育行政の中央集権化

- (i) 教育委員会の公選制を任命制にし、整理統合を促進させる
- (ii) 教科書の検定、並びに広域採択制

- (i) 教育労働者の政治活動禁止と日教組に対する破壊工作および勤務評定
- (ii) 学習指導要領の法制化（リモコン教育）

二 教育機構の複線化

- (i) 幼稚園の義務教育化
- (ii) 進学組・就職組クラス編成（二大路線）
- (iii) 高校の多様化―後期中等教育の在り方
- (iv) 大学の文科系の縮小（理系優先）

三 排外主義教育

- (i) 道徳教育の復活（「修身」の復活化？）
- (ii) 期待される人間像（典型的な支配者の後継者のイメージとしてあげられる）
- (iii) 外国人学校法案（民族排外主義教育）
- (iv) 神話教育の復活（帝国主義教育の顕著な例）
- (v) 国防教育の復活（「」

このように教育に対する支配を強化し、国内体制に見合った教育を行ない、侵略のための人間をつくり出すのが帝国主義教育の姿であり、支配者階級のイデオロギー攻勢となって現われてきている。

(b) 叛逆の闘い――労働市民との連帯

これらの攻勢に対し、断固として叛逆する学生との闘いに対し、政府ブルジョアジーは治安対策と暴力キャンペーンをもって、体制内暴力装置＝機動隊を使い闘争圧殺を行なってくるのである。一月十八・十九日の東大での権力の醜い弾圧と本質を全人民の前にさらけ出し、現在ありとあらゆる地域、職場、学園に機動隊が入り込み闘争圧殺に血まなこになって騒いでいる。

学生の極めて改良主義的な、即自的な、自然発生的な要求でもって闘われている闘いが、東大のように「帝大解体」また日大においては「古田体制打倒」というスローガンにもみられるように、自らの存在を問いつめ、そして、現在全国各地で闘い抜かれている労働者、人民との結合を、その闘争の発展の唯一の方向と定め、連帯を求め、文字どおり日本階級闘争の勝利の大道を邁進せんがために闘われてきた。

六七年度の羽田闘争は約三〇〇〇名の先進的な部隊によって切り開かれている。六八年一〇月二日の国際反戦統一行動においては、東京の新宿人民戦争を筆頭に、全国四〇万の決起があったことを忘れてはならない。今また東大・日大闘争を筆頭に、全国八〇数大学での造反とそれに呼応した多くの労働者農民の闘いは全国津々浦々に広がっている。また、これらの一連の不屈の闘いに対し、多数の知識人・文化人が支援と連帯の声を寄せている。京大の井上教授をはじめ、各界のインテリゲンチヤも、自己の存在そのものを問いただした時、彼らの多くが「自己保存」のため合理化してしまいうなかにあって、これらの革命的インテリゲンチヤの勇氣ある行動と発言に対し、我々は心から連帯し共に闘う必要がある。東大においても、助手・講師等始め、東大においては仏語科の教授・助教授全員が闘争支持を打ち出している。

(c) 学生運動は全人民的政治課題である

我々の闘いは、東大闘争や日大闘争のさし示す方向性を断固文闘委の旗の下に堅持する必要がある。

る。二五〇日間余りにわたってきた実力闘争の地平を、今こそすべての学園・職場における闘いと積み重ねよう。このような闘いを集約するものとしての内容は、どのような学園・職場闘争における改良的な要求であろうとも、われわれはそれを無視することはできない。

しかしながら、その闘争を改良的に歪曲化してゆくものに対しては、断固として闘いを挑まなければならぬ。そして、そのような自然発生的な内容をはっきりと克服するような方向性を示す必要があり、これを維持する限り、我々の闘いはどんなに戦闘的であろうとも、あるいは暴力的であろうとも、実力闘争として展開されようとも、我々は大衆から孤立することはないし、大衆的な大規模な人民の包囲による、人民を我々に近づけるところの闘いとして展開することができると確信する。

我々は多くの闘いに学ばなければならない。ある学友は、基地闘争の中で労働者階級の登場の必要性を痛感し、小グループをつくって工場地帯に入って比較的大きく、そして最も低賃金でもっとも労働条件の劣悪な工場に集団就職し、労働者の中で自己を鍛え上げ、革命的な労働運動の前進のために奮闘している。また、ある学友は三里塚の闘っている農民に日大闘争を報告するかたわら、援農活動とともに部落の人達全員にビラのつくり方から学習会の方法等、思想工作と政治工作の具体的実践を学習している。

学生の闘いが、社民プチブル・議会主義者や反革命修正主義者に圧殺され続けられながらも、尚

かつ広汎な労働者農民市民の階級としての本能をゆり動かすことは、何も日本に限ったことではなく、現在全世界で闘われている学生運動をみても同一性を有している。その頂点が六八年のフランスの学生・労働者の革命的闘争であったことは余りにも有名である。

それ故、ブルジョア階級は、学生の正義の闘いに対して恐怖し、学生の闘いに対しては見さかしくもなく目茶苦茶な弾圧を行使するのである。学生の闘いを弾圧できずに、教育も、安保も、沖縄も、全て帝国主義的に集約強化することは出来ない、として「大学問題の治安対策化」をふりかざしている。

権力は「治安」とし提起し、学生の正義の闘いを政治的に孤立化させるに止まらず、大量検挙等に見られる如く、暴力的なファッショ的弾圧を強いていることから、我々の闘いは全人民的政治課題であることがはっきりと自信をもって言えるであろう。我々は一切の反労働者の性格をぬぐい捨て、はっきりと共に闘う強固な姿勢を示し、全人民の先頭に立って闘いを推進し、六〇年から七〇年代への移行する大きな結節点「安保・沖縄」闘争を踏まえつつ、「古田体制打倒」の連続的な闘いを組み込み、その闘争の拠点こそが大学のキャンパスであるということを決して忘れてはならない。ここに叛逆のバリケードの持つ大きな任務と意義が存在していることを確認するならば、全ての日本大学の学友諸君、大胆に全人民と結合して、大胆に学生反乱Ⅱ階級闘争の怒濤の渦の中に突撃しようではないか。